浦越（うらごし）

前回、里川地区への道のりで「大正から旧十和村へ。田野々トンネルを抜けると次は浦越トンネルが待つ。この浦越トンネルに入らずに左側の旧道へ。しばらく行くと浦越の集落が現れ、四万十川を渡る抜水橋がある」と書いた。里川への抜水橋を渡る手前の、地区の中心となる集落と、渡ったところを右に行った、予土線の線路付近の集落を合わせて浦越地区となる。

平成3年に浦越トンネルが開通するまでは、集落を走る旧道が国道であった。

「トンネルができたのが、十和村の中では最後の方やった。こんな狭い道をたくさんの車が行き交いよったねぇ。大きなトラックなんかは、行き違うのに苦労しよった」と、地区の方。トンネルができる3年前の平成元年、浦越小学校が閉校となった。里川の回でも書いたように、これに伴い、昭和小・中学校へのスクールバスが運行された。

四万十川流域の多くの地区がそうであったように、ここ浦越も、農業用水、生活用水にまつわる地区の人々の苦労を抜きには語れない。戦前までは、この地区での米作は、湧き水があったところでしか行われていなかったという。「10aあったかどうか」だそうだ。生活用水も、湧水や井戸のあるところにわざわざ汲みに行っていたそうである。

そんな浦越集落の裏手の小高い山をクネクネと登っていくと広々とした田畑が広がっている。水に苦労した地区の、しかも山の上にである。この広大な田畑を潤す水はどこから来ているのか？その水は、およそ1．3km北、浦越トンネル西側出入り口の上方の谷水が引かれている。山の尾根づたいの水路を通ってである。この水路は1950（昭和25）年に完成した。重機などない時代である。すべて人力の手作業であった。初めはコンクリートもなく、土を掘っただけの水路であったため、時々補修作業が必要であった。50年ほど前に、ようやく半分をコンクリートで固めた。その後、さらに半分をパイプにすることができた。今では全てがパイプになったということである。

この水路を通じて流れてくる水は、山上の圃場を潤した後、人々の生活用水として使われた。当時の人々は「せめて、上では牛を洗うなよ」とよく言っていたそうである。ちなみに、水路を流れてくる水量はそれほど多くないということであるが、地区の方によると「この辺りの山は赤土で、田んぼの水持ちが良いので賄えている」とのことだ。コンクリートやパイプになる前の水路の補修も、赤土を掘って粘土代わりにしたということも教えていただいた。山上の圃場脇に、これを完成させた人物の偉業を記した碑が建っている。

ところで、地区の産土神は河内神社なのであるが、この神社の鳥居の横に、田野々の回などでご紹介したのと同じ「耳神様」があるのだそうだ。「昔の子どもたちは川で良く遊んだからか、中耳炎になる子が多かったからじゃないかね〜」ということである。なるほどそうかもしれない。

水路完成の記念碑。古くなった碑の隣に、近年、同じ文言の碑が建てられた。

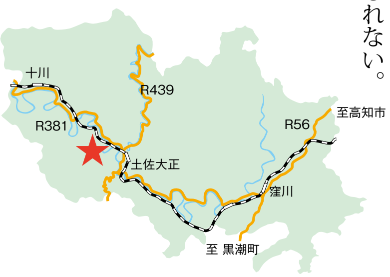
町のうごき

（1月31日）	人口	前月比
男	7,523	-23
女	8,187	-29
計	15,710	-52
世帯数	8,120	-20

	出生	死亡	転入	転出
男	1	27	11	8
女	1	21	13	22
計	2	48	24	30

（1月中の届出）

窪川地域 11,164人　大正地域 2,179人　十和地域 2,367人



四万十町通信 2023.3月号 Vol.204（毎月10日発行）
●発行／四万十町企画課　●印刷／窪川印刷
〒786-8501 高知県高岡郡四万十町琴平町16-17 (0880) 22-3124 FAX (0880) 22-3123

UD FONT by MORISAWA 本文など内容の一部に見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。